

PERIPLUS Civis Magazine

海外留学が変えたこと

政権交代と東日本大震災、そして海外留学

2009年に自民党から民主党への政権交代が起きた時は小学6年生だったんですけど、”世間がお祭り騒ぎしているな”と感じて、あと学校での鳩山内閣の閣僚について調べてみるという授業があったことが政治に興味を持つきっかけでしたね。でもその時にがっつり興味を持ったわけではなくて、“政治ってこういうもんなんだなあ”くらいの認識だったんですが、東日本大震災とその後の政治の対応を経験したことが政治に本格的に興味を持つきっかけになりましたね。」

そう話してくれたのは、中野絢斗さん。(23)

民主党への政権交代と東日本大震災という2つの出来事を通じて、政治に興味を持つようになった中野さんだが、当初は“自分自身が興味関心を持っていればいい”という考えだったという。しかし、ある事をきっかけにその考えが変わったと話す。

「鼓腹撃壊という中国の故事があるんですけどその由来を知ってからは、”政治に無関心なことは平和な生活ができていることの証だから良いことだ”という風に僕自身も考えていましたんですね。でも大学在学中にベラルーシ共和国に留学した経験が今までの考えを変えるきっかけになりましたね。ベラルーシは東ヨーロッパにある旧ソ連圏の国なんですけど、ルカシェンコ大統領が1994年からずっと大統領を務めていて、事実上の独裁体制なんです。日本と様々な面で全く違う、政治活動の自由も無ければ発言権も無いし、生活水準も高くは無いというのをこの目で見てきました。また、その帰国する際は陸路でトルクメニスタンなどを回ってきたのですが、立ち寄ったトルコでは選挙の結果が無効になったり、キルギスでは政変を目の当たりにしました。そういう出来事を自分の目で見て感じたことは、”政治って無関心でいたらいつかはこうなるんだ”ということです。政治学者の丸山眞男さんの言葉に“権利の上に眠る者”というのがあるんですけど、日本も今のままいくと将来ベラルーシとかみたいになっていくんじゃないかな、という危機感を感じました。そして、より多くの人に政治の大切さを知ってもらう必要があると考えるようになりました。」



中野絢斗さん(23歳)

1997年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。政権交代や東日本大震災を機に政治に関心を持ち、海外留学をきっかけに周囲にも関心を持つもらうことの重要性に気がつく。会社員として働く傍ら、地元川崎市で若者も含めた多世代が主体的に取り組めるまちづくりを推進中。

ベラルーシの若者にとっての政治

留学

学先のベラルーシで感じた若者と政治の関係について中野さんは、次のように語る。

「よく日本の若者と比較されるのは欧米先進国の若者が多いと思うんですけど、僕が留学していたのは旧ソ連圏なのでそもそもその感覚が日本や欧米とは違っていて、日本や欧米が気候変動とかZ世代的な政治問題について取り組んでいるのに対して、ベラルーシなどの若者は自由民権運動のような政治運動、つまり政治そのものに参加させろという運動がメインですね。これはそもそもの大前提が違っているからで、政治への参加や発言の自由が保障されていないところが向こうの若者にとってのスタートラインになっているんです。そういう意味ではとても日本の若者とのギャップを感じましたね。日本の若者は選挙に全然行かないのにベラルーシでは毎日のように平等で公正な選挙を求めて大規模なデモが起きていて、特に若い世代が年上の世代よりも積極的に政治参加を要求して活動しているという印象です。特にインターネットやSNSというツールを使いこなしているから、諸外国の情報とか手に入れることができる状況にあるので自国の政治体制との違いを知る力ができるし、やっぱり経済水準も低いのでそれに対する不満が政治が良くないというのに結びついて、政治参加を求めるデモが起きていると考えます。その視点は日本の若者には無い視点だと思いますし、見習わないといけないと感じました。選挙とか民主主義とか自由って大前提となるとしても大切な価値観で、それは当たり前のものではなく守っていかないといけないものなんだ、ということをすごく認識させられましたね。」

政治へのハードルを下げることが重要



2019年にキルギスで発生した政変の一場面

写真提供 中野さん

海外留学からの帰国後、日本若者協議会に入った中野さんは、そこで活動してみて感じた日本の若者と政治の距離について、

「意外と僕らの世代も政治に興味関心を持っている世代が多いんだなという印象を受けました。正直もっと少ないと思っていたので、ポジティブな誤算でしたね。メンバーも同世代でもそれぞれいろんな分野に問題意識を持っていてそれが驚きでした。ただ、諸外国と比べたら断然少ない方だとは思うのでそこは課題だと感じます。あと若者よりも上の世代との関係も問題があるのかなとは思います。色々活動している中で、若者は若者の感覚で自由に主張とかはできるんですけど、それに対して上の世代との衝突や

理解をもらえない部分があるので、そこはどう歩み寄っていくのかというところは課題ですよね。」と語る。

また家庭内で政治について話をしたり、考えたりする機会を作っていくことも大切だという。

では、若者と政治の距離を近づけるにはどうしたら良いのか？これについて中野さんは、もっと政治への偏

見を無くし、ハードルを低くしていくことが必要だという。

「若者が政治に興味を持てないのはやっぱり、政治への偏見や、”政治=国会議事堂”みたいな認識ができるてしまっているんじやないでしょうか。僕は政治ってすごくハードルの低い、身近なものだと思っているんです。その為には学校や地域が積極的に身近な日常的な政治について触れ合える場を提供すべきだと思います。あとは、政治に関心のある若者だけが集まるのではなく、ぱっと見政治とは無関係なことも政治に結びつけて、いかにそれまで興味を持って無かった人に面白そうだなと思ってもらうことが重要だと思います。」

ピザを分けること

最 後に中野さんにとって“政治とは”を伺った。

「僕にとって政治とは、”ピザを分けること”ですかね。政治というと堅苦しいというイメージが多いと思いますが、そんなことはなくて留学先のベラルーシなどで政治への関心が高いのも根本的には自分の生活と政治が直結しているという考えがあるからだと思います。だから何人かで集まって一つのピザを誰にどれくらいわけるのか、これも政治だと思います。」

日 本にいると当たり前のように思ってしまう、選挙や民主主義、そして政治参加。しかし中野さんが留学したベラルーシではそれは当たり前のものではなく、その他の国々や地域でも決して当たり前のものでないことが多い。一見するとそういった国々は民主主義が”遅れている”と捉えることもできる。しかし、裏を返せば私たちが”当たり前のもの”として持っている権利の本質的なものと向き合っているのではないだろうか。では、私たちはその本質的なものとしっかり向き合っているだろうか。

先日実施された千葉県知事選挙では様々な立候補者がいたが、それは原則誰でも選挙に立候補することができることの証でありとてもかけがえのことだと考える。

今の私たちがベラルーシの若者のように情熱的に政治参加を求め行動するということができないかも知れない。しかし選挙や民主主義、自由が”当たり前”になったからこそソフトな形で気軽に政治と触れ合いそれを認識することが一層必要にならないだろうか。